植物學雜誌第二十六卷

第三百號

明治四十五年一月三十一日

言語の上より見たる「ヲガタマ」の木

理學博士 松 村 任 三

Matsumura, J.: — A name of the tree "Ogatama" from the point of view on linguistic research.

和訓栞に「ヲガタマノキ」古今集に見ゆ、世の古今傳受には「御賀玉ノ木」といへども假名たかへり、「賢木」をいふといへば招魂ヲカタマの義なるべし、今も伊勢神宮の禰宜の寶物を「ヲカマ」といへりキタ反カ也、日向の國小戸のいはやのあたりにいふ物は「トビラ」の木なるべし、一説に門松の下に立る木を「ヲカタマノキ」といふといへり、一木には限らざるにや、日本紀竟宴の歌に『玉柏「ヲカタマノキ」の鏡葉に神のひもろぎそなへつるかな』か、れば岡靈の木の義にて直に柏をいふにや、又二木にや、或は鳥柴をもいふと定家卿の説也、貞徳自筆の和歌寶樹にも宗祇の切紙を難して三箇ならで古今集の奥義は歌序の中に多き事也といへり、後奈良の院享祿元十一月十六日こきんの御傳授逍遙院申さる、と御湯殿記に見えたり』とあり。

雅言集覽に「ヲガタマノキ」(古、物名、友則)『みよしののよしののたきにうかび出るあわヲカタマノキゆとみつらん、』(同、墨消の歌)『かけりても何ヲカタマノキてもみんならはほのほとなりしものを』真淵マツミの説に檜スギの木ともいひて「ツルバミ」といふみのなる木なり、その子「玉カシハ」ともいふなり、といへれどしひたる説にてうけがたし、契沖が説にいかなる木ともしれず、六帖等にも出さず、古今集より外にはよまず、或抄に「ヲカタマノキ」説々多しといへどもさしたる證據なし、分明の相傳もなしといへり、これを正説とすべし。補に此もの日向高千穂に多し、肥前長崎にもあり、三鳥三木考に圖を出しおけり、彼書につきて考ふへし』とあり。

俚言集覽に (萬淵翁記) 檜「クヌギ」になる實青き玉の様なればと云々、閑田耕筆云、薩摩渇の鬼界島、屋久島、

元了島トツクラの内に「チガタマノキ」といふものありとぞ、そのやくの島より得たるもの津の國の灘の吉田氏に秘藏す、花は紫の瓣黃蕊、實は橘柚類となん、是往古よりあるもの歟しらねど聞まゝにしるす、或は秘書と號けて心得ぬ事のみ書たるものに古今集の「チガタマ」の木は御賀玉とて祝ふ事に用ふるもの、よし書るは笑ふべし、物名の歌『みよし野のよしのの瀧にうかび出るあわ』チガタマノキ』ゆと見ゆらんといふさへ賀のものには似つかはしからぬに、まして墨滅の歌には『かけりてもなに』チガタマノキ』でも見んからはほとなりしものを』といふはたぐひなくいま／＼しければ、ために墨滅なるべけれど、元來賀に用うるものにかくよむべきものは、もとより「ヲ」「オ」の假字の違ひはわきまへにや。増に賢木の異名なりといふ、或云、此樹日向の高千穂峯にあり、神代よりの樹といひ傳ふ』とあり。

任三曰く、以上三書の説共大同小異にして、語源論の取るに足らざるは言ふまでもなく、植物の種類もその何たるを指せしにや、判斷に苦しまざるを得ず。茲に源與清が三樹考に據るときは三書と異なり、遙かに優れたる説なるを見るべし、即ち左の如し。

劈頭に『廣心樹チカダマ 木蘭之屬、日向、薩摩等國人呼チカダマ乎加多萬、蓋漢名廣心樹也。 櫨チカダマノキ 桂屬之有實者、乎加小香也、多万謂實之圓形也。』といひ置きて、賢木サカキは桂カツラノキ、楠クスノキ、櫨シキミ廣心樹チカダマなどの總名、加豆良乃木は櫨チカダマノキ木犀チカダマノキなどの總名、櫨チカダマノキは天竺桂メカヅラの類の總名なれば、この三種をとり出で説を立、云々賢木は香き常葉木のことにて、桂、楠、櫨、廣心樹などをいへど、ことさらに賢木とて神事に用ふるは櫨なり。櫨は天竺桂クスタブ、大多比オホタビ、白多夫シロタフの總名なり。云々。櫨チカダマノキの乎加チカは小香カなり、荷チカトトキ、茵チカツなども香きものなれば然いふなり。多末タマは玉にて、實の圓なるが玉に似たればいふ。云々。俗に多万タマノキ乃木とよぶ、古今榮雅抄卷十に、櫨チカダマノキの字を書れしも、靈木タマノキの合字なり。云々』と説けり。

任三曰く、源與清が櫨は「クスタブ」、「オホタビ」、「シロクブ」の總名なりとの説は當を得たるが如きも、廣心樹

をも「ヲカダマ」として櫛と特に區別したるは言語の上よりしては其の意を得がたし。種類の上よりしては今日之を「ヲガタマ」として此に云ふ木蘭之屬にして、*Michelia* なれば首肯する人も多からむ。

今按するに、古へは今日本草家がものする如く、各種を一々區別して呼べるにあらずして總べて外觀の類似あれば皆總名にて事足り、精密の區別はなかりしなるべし、今尙支那の植物名は此の如きもの多し、又植物家にあらざるものは然らざるを得ず、

茲に言語の比較上より考ふるに、*aga-tama* の *tama* は曾て本誌二十三卷 p. 338 に述べたる如く、「楠」の古音 *nam* の轉 *tam* じて *Machilus* 又は *Cinnamomum* なるべく、「栴」の日本音 *dantan* 又「栴」の同音 *dan, tan* にて、爾雅に栴栴とあり、「クスノキ」と譯せるもの其語源にして、源與清がいふ如き圓なる義にあらず、圓實を結べる故に小香圓とは牽強も甚し、此の *tama* は樹名にして實の名にはあらざるぞ、さるからに *oga-tama* は *kusutabu, oo-tabu, shiro-tabu* 等の總名とはなれるにあらずや、

抑も玉の意義ある日本語の起源よりして源與清等には明瞭ならざりしなり、夫れ此の *tama* てふ言は「壇」の日本音 *tam* にして、玉篇に玉也とあり、又「琛」又「賸」の古音は *dam* にして a beautiful precious stone の義あるより來れるにて、圓の意義ある *tama* は「團」又彈の日本音 *tam* より來れり、*Ainu* 語にて *tama* とらふも a ball, beads の義にして同言なり、又靈の意義ある日本語の *tama* は「心」の安南音 *tam* と同言にして、「靈」の福州音竝に上海音 *lang* の轉音が *tan* なることは猶「楠」の古音は *nam* なれども其汕頭竝に廈門音は *lan* なるが如し、*Ainu* 語にて *ram* とらふも *Mind, heart, soul* の義ありて即ち同言なり、唯(一)と(一)との異ひあるのみと知るべし。

和訓栞、雅言集覽、俚言集覽等には皆 *oga-tama* とあるを獨り源與清が三樹考にのみ *oka-dama* とものせるは偶、小香の語源を按出せるに因れるものにして、元來の語義にあらず、そは今按するに *oga-tama* の書方に「ヲ」と「オ」との二様の假字あるが如しと雖此は元來香木の名なりしを以て「オ」の假字こそ適當なれ、そは桂(カツ

○言語の上より見たる「チガタマ」の木 松村

ラ)と同種類の名にて、古への總名の一ともいふべく、又異名ともいふべき程のものに過ぎざればなり、よりて「オガタマ」は「香楠」又「香榊」又「香栴」の二字音より起れることを知るなり、「香」上海音 ong にして、皆人の知れる如く、fragrant, odoriferous, sweet の義あるにあらずや。若し之を「ヲ」の假字にするときは「黄楠」「黄栴」「黄柑」等の二字音にて、「黄」の廣東、福州、上海音共に wong にして、此も皆人の知る如く、yellow の義なれば「黄心樹」(三樹考には廣心樹と書けり)の漢名には適へり、後者は材質黄色なるの名、前者は香木なるの名にて ong(a)-tama 又 wong(a)-tama より起りて、字音そのまなること明けし、ざるを源與清は上言を小香ヲカ(o-ka)と清音に呼び、下語を dama と濁音に稱へたるなり、意義は大略同しけれども、語源は全然根本を異にせり。夫れ tama といひ、dama といひ、語根は同一にして與清が tama と濁らせたるは敢て非難するに及はざるのみならず、其轉訛頗る多きものなり。今茲に之を擧ぐれば左の如きものあり。

原言は tam 又 tan 或は dam 又 dan なりしが、日本語訛しては母音を語尾に加ふるが故に種々に轉して

Tama (筑前、伊豫、駿州、常陸方言)

Tame (新島方言)

Tami (八丈島方言)

Tanu (美濃方言)

Tabi (出雲方言)

Tabo (加州方言)

Tabu (筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、日向方言)

Tanba (藝州)

Tanbu (琉球大島方言)

Dama (筑前、豆州方言)

Dami (豆州大島方言)

Damo (筑前、勢州、播州、佐渡)

となれり、(a) (i) (e) (o)と有らん限りの母音を添加して訛れるものと謂ふべし。
複言にして(t)を以て始り、上言を成すもの左の如し。

Tama-gara (伊豫)

Tama-kusa (伊豫)

Tama-shiba (紀州)

Tama-no-ki (遠州、駿州、播州)

Tama-gusu (伊豆、伊豫)

Tama-shiba (美濃) 甚シキハ tano-shiba ニ訛レリ

Tabi-no-ki (出雲)

Tambu-no-ki (琉球大島)

Tama-tsuboki (伊豫)

Tama-asa (伊豫)

複言にして(t)を以て始り、下言を成すもの左の如し

Onga-tama (紀州)

Kara-tabu (筑後)

Kusa-tabu (筑前)

Kusa-tabu (日向)

Koga-tabi (伊豆)

○言語の上より見たる「ナガタマ」の木 松村

Aka-tabi (出雲)

co-tabi (三樹考)

Shiro-tabu (筑後)

複言にして(a)を以て始り、下言を成すもの左の如し

Ma-tami (八丈島、大島)

Kusu-damo (勢州)

Abura-damo (勢州)

Men-damo (勢州)

Kusa-dumi (豆州大島)

Kuro-dama (豆州)

Kara-damo (播州)

Shio-dama (上總)

Sho-dama (房州)

Shiro-damo (三樹考)

Mendoo-damo (三樹考)

以上の如く、一單音の言は轉訛に轉訛を生し、又複言を成して漸次數多の Vocabulary を形成し異種の植物を判別せる狀況に達せりと雖地方に依りては其種類の有無もあり分布等しからざるより、元來の意義に異なる別種の植物名となれるも鮮からず、原義の楠、枅、梔は香木にして「クス」(kusu)に近き種類なるを以て、Tama-gusu 又 tama-kusa と同義の二言を作りて呼ぶ地方もあり、又 kusu-tabu 又 kusa-tabu 乃至 kusu-damo 又 kusa-damo と上の言を轉倒して稱へる地方もあるなり、要するに以上の諸方言は概して Lauraceae (樟科)の植物例

くば *Cinnamomum*, *Macilus*, *Litsia*, *Lindera* 等ニ命名せるもの多くして、稀に *Magnoliaceae* (木蘭科) の種類に誤りて附する名もあり、「ヲガタマ」は今之を *Michelia* に命じ「タムシバ」は今之を *Magnolia* に充てたる等
 是なり。蓋し樟科以外の種類にても多少の香氣を含めるもの若くは枳タマに葉形外觀類似するものなるが如し。此
 は元より語源を辨へず植物の種類をも知らざるよりの誤謬命名にして紀州にては *Lindera* (クロモジ) を「ヲガ
 タマ」と呼び、伊豫にては *Cinnamomum* (ヤブニクケイ) を「タマシバ」と稱へり、蓋し「タムシバ」といひ、「タ
 マシバ」といふも元同言なりと知るべし。

再ビからたちノ北方分布ノ限界ニ就テ

白 井 光 太 郎

Shirai, M.:—Review on the Northern Limit of Distribution of *Citrus trifoliata* Makino in Japan.

予ハ曾テ本誌第二百五十號ノ紙上ニ我國ニ於ケルからたちノ北方分布ノ限界ニ就テ所見ヲ述ベシ事アリシガ今度再
 ビ同問題ニ就キ記述スル事トナレリ其故ハ昨年一月中北米合衆國和聖東府農務省植物產業課ワルター、スウイング
 ル氏ヨリ來書ニ日本產からたちノ北方分布ノ最極端ノ地方數所ニ生スル者ノ種子ヲ得テ柑橘類耐寒雜種作成試驗ノ
 用ニ供シタケレバ採集ヲ依頼シ度トノ事アリタレバ此種子ヲ得ル爲ニ更ニ東北地方ニ於ケルからたち分布ノ狀況ヲ
 調査スルノ必要ヲ生シタリ然ルニ幸ニシテ昨年夏期休暇中岩手青森秋田ノ三縣下へ學術實地研究ノ官命ヲ拜セルヲ
 以テ此等ノ事柄ヲ調査スルノ便ヲ得タレバ茲ニ再ビ所見ヲ陳述スル事トナリシナリ

(一) 探檢日誌

明治四十四年八月九日午後二時府下澁谷停車場出發

同十日午前八時東北線平泉驛下車中尊寺附近巡廻俚人ヨリ此地ニたちばなノ生樹高四五尺根廻五寸ノモノアル事ヲ
 聽キシモ實物ヲ見ルニ及バズシテ此處ヲ去リ午後二時盛岡市ニ着ス盛岡ニモたちばなアリト聞ク未ダ其眞偽